岡大医短紀要，3：55～61，1992
Bull. Sch. Health Sci. Okayama Univ.

小児の母親付き添いによる入院が家族に及ぼす影響
—家に残された同胞の精神面への影響—

太田にわ[1)]・小野ツルコ[1)]・太田武夫[1)]・松井優美子[2)]

The influence on the family of mother's staying away from home in order to take care her child who is suffering from a disease at a hospital
—Psychosomatic changes in children left at home—

Niwa OHTA[1)], Tsuruko ONO[1)], Takeo OHTA[1)], and Yumiko MATSUI[2)]

The self- administered questionnaire survey by mail was done by 135 mothers having been away from their home in order to take care of their children treated at the university hospital and having left her other children at home. Data on the psychosomatic changes of 172 children cared for by persans other than their mothers during their mothers' absence were obtained.

The relationship between psychosomatic influences on these children and the situation they were put in was statitically analysed by x^2 test and multivariate analysis with Hayashi's type 2 quantification.

The results showed that whether there was an influence on children or not was affected by some factors such as their age, who took care of them and the duration of the mothers' absence. According to their ages, a variety of different psychosomatic influences was found. The most frequent influences are emotional ones (69.1%), followed by behavioral ones (18.6%) including 8 cases of children refusing to go to school or nursery school.

These findings are instructive for nurses who give advice to mothers in such a situation.

Key Words：家族，付き添い，同胞，精神的影響

1．はじめに

近年，家族もまた看護の対象であるとの考えが普及し，その重要性が認識されている[1)]。小児看護の場合には特にそのことを痛感することが少なくない。子どもが入院となった時，その子どもが小さかったり，病気が重い場合は母親が付き添うことが多く，家庭生活にも変化が生じる。この場合母親は家族のさまざまな問題を抱えることになる[2)]。そして患児の同胞を家に残す場合には，より一層母親の不安が強く，特に同胞の精神面への影響についての不安が大きいことを認め報告した[3)]。今回はその同胞の精神面への影響を家族の状況との関連で明らかにし，付き添う母親の援助への一考にしたいと考え以下の研究を行った。

2．研究対象および方法

1983年から1991年の間，大学病院小児科で付添いを2週間以上し，家に子どもを残していた母親を調査対象としてアンケート調査を行った。回答は135名（回収率81.3%）の母親より得られ，その母親が家に残していた子ども（以下同胞とする）172名に関する情報を分析した。調査方法は郵送法による質問紙調査によった。調査内容は母親が留守期間の家族の状況と同胞の精神面への影響である。まず家族状況の違いと同胞への影響の有無についてカイ2乗検定により比較した。さらに同胞への影響の有無の決定要因について数量化II類で多変量解析を行った。この分析においては外的基準を同胞の影響の有無とし，説明変数に同胞の性

1）岡山大学医療技術医療短期大学部看護学科
2）岡山大学医学部附属病院小児科

別，発達段階，同胞数，家族形態，世話人，母親の留守期間，帰宅頻度の７項目を用いた。これらの統計処理は現代数学社のパーソナルコンピューター用データ解析ソフト HALBAU を利用した。

３．結　　果

１）同胞の実態

表１のとおり家に残された同胞172名の性別は，男児が87名（50.6%），女児が85名（49.4%）でほぼ同数であった。発達段階別にみると幼児期の子どもが85名（49.4%）と約半数で，次いで学童期のものが多く，乳児期の子どもは11名（6.4%）であった。これらの同胞数は１人が92名（53.5%），２人が68名（39.5%），３人が12名（7.0%）と１人のものが半数以上を占めていた。

同胞のおかれた状況についてみると，家族形態は３世代家族が72名（41.9%）に対し，２世代家族が100名（58.1%）と核家族の方が多い。母親の留守期間は１～４か月未満が99名（57.6%）と多く，４か月以上の38名の中には１年以上が６名あった。同胞を世話をしていたのは別居の祖父母が一番多く84名（48.8%）で，次に同居の祖父母52名（30.2%）であった。父親による世話は25名（14.5%）であった。すなわち，これまで生活をともにしていた家族による世話は併せて77名（44.7%）で別居の祖父母によるものより少なかった。母親

表１　同胞の状況と精神・身体的影響の有無

状　況（７項目）	合　計 n=172	影響あり n=99	影響なし n=73	x^2値
同胞の性別				
男	87(56.6)	49(56.3)	38(43.7)	0.11
女	85(49.4)	50(58.8)	35(41.2)	
発達段階区分				
乳児期	11(6.4)	4(36.4)	7(63.6)	
幼児期	85(49.4)	54(63.5)	31(36.5)	4.53
学童期	62(36.1)	35(56.5)	27(43.5)	
思春期	14(8.1)	6(42.9)	8(57.1)	
同胞の数				
１人	92(53.5)	54(58.7)	38(41.3)	0.10
２人以上	80(46.5)	45(56.3)	35(43.8)	
家族形態				
２世代	100(58.1)	64(64.9)	36(36.0)	4.05*
３世代	72(41.9)	35(48.6)	37(51.4)	
母の留守期間				
１ヶ月未満	35(20.3)	22(62.9)	13(37.1)	
１-４ヶ月未満	99(57.6)	52(52.5)	47(47.5)	2.48
４ヶ月以上	38(22.1)	25(65.8)	13(39.2)	
同胞の世話				
別居の祖父母	84(48.8)	53(63.1)	31(36.9)	
同居の祖父母	52(30.2)	27(51.9)	25(48.1)	2.08
父親	25(14.5)	13(52.0)	12(48.0)	
その他	11(6.4)	6(54.5)	5(45.5)	
母親の帰宅頻度				
毎日-１回/週	38(22.1)	23(60.5)	15(39.5)	
１回-数回/月	39(22.7)	29(74.4)	10(25.6)	3.08
なし	56(32.6)	32(57.1)	24(42.9)	
不明	39(22.7)			

＊５%以下の危険率で有意の差

の帰宅頻度は，「毎日ないし週に１回」というものが38名（22.1%），「１か月に１回から数回」が39名（22.7%），「帰宅なし」が56名（32.6%）と帰宅頻度はさまざまであった。「帰宅なし」とするものうち12名は１か月以内の入院であった。

２）同胞の状況と影響の有無

母親から見て精神面に影響があったとされた同胞は99名（57.6%）で，なかったもの73名（42.4%）に比べて多い。この影響はどのような要因に左右されるか，関連すると思われる７項目について影響の有無別にx^2検定したのが表１である。家族形態が２世代家族か３世代家族かにおける影響の有無に５%以下の危険率で有意の差が見られ，２世代家族の同胞の方に影響ありとするものが高い傾向を示した。さらに上記の７項目を説明変数群とし影響の有無を外的基準として，数量化２類による多変量解析を行った結果は表２の通りであった。「同胞の発達段階」「母親の帰宅頻度」「同胞の世話人」が高い範囲の値を示したが，x^2検定で差を認めた「家族形態」は「同胞の数」についで低い値を示した。また，この分析では個々のケースについて７項目の変量から判別得点が得られるので，これに判別境界値を設けて理論的区分として「影響あり」，「影響なし」の２群に分け，実際の観測値と比較すると正判別率は59.4%であった。

３）精神面への影響

同胞への影響内容を望月[4]の枠組みを参考に「情緒への影響」，「行動への影響」，「身体的反応」「神経的習癖」，の４群に分類すると表３のとおりであった。「情緒への影響」が多くを占め，延べ204件のうち141件（69.1%）で，次いで「行動への影響」が38件（18.6%）であった。「情緒への影響」について件数の高い順で見ると，「さびしそうな表情」33件，「甘える」30件，「泣く」，「不安がる」10件の順であった。「行動への影響」の中には登園拒否，登校拒否が合わせて８件認められた。登園・登校拒否の子どもの年齢と性別をみると，９歳児の女児３名，３歳の男児２名，そして４歳女児，５歳女児，12歳男児の子どもであった。次に影響内容について発達段階でみると表４のとおりで，乳児期と幼児期あわせて「母親に寄りつかない」が６件であった。幼児期では「甘える」が20件，次いで「さびしそうな表情」が16件などであったが，学童期になると逆に「さびしそうな表情」が16件と一番目に多くなり，次いで「甘える」，「不安がる」がともに７件であった。思春期では総件数が減少したが「寝不足」があった。

表２　数量化２類による同胞の状況および外的基準の範囲

状況（７項目）	カテゴリー	カテゴリー数量	範囲
発達段階区分	乳児期	0.746	1.683
	幼児期	−0.359	
	学童期	−0.008	
	思春期	1.324	
同胞の世話人	同居の祖父母	0.010	1.530
	別居の祖父母	−0.421	
	父親	0.613	
	その他	1.109	
母親の帰宅頻度	毎日-１回/週	0.249	1.432
	１回-数回/月	−0.994	
	なし	0.488	
母の留守期間	１ヶ月未満	−0.348	0.745
	１-４ヶ月未満	0.360	
	４ヶ月以上	−0.385	
同胞の性別	男	0.191	0.368
	女	−0.177	
家族形態	２世代	−0.121	0.293
	３世代	0.172	
同胞の数	１人	0.042	0.090
	２人	−0.048	
外的基準	影響あり	−0.219	0.593
	影響なし	0.375	

４．考　　察

１）同胞がおかれた状況について

母親が家に残していた子どもは幼児期，学童期が多かったが，中には乳児期の子どもを残して付き添いをするものもいた。このことは子どもの入

表3　精神および身体への影響

発達段階		情緒の障害 N＝141	行動の障害 N＝38	身体反応 N＝17	神経性習癖 N＝8
乳児期	11人	3	4	0	1
幼児期	85人	70	23	8	5
学童期	62人	62	10	6	2
思春期	14人	6	0	3	0
影響内容 延べ件数 204件		さびしそうな表情 33 甘える 30 泣く 10 不安がる 10 反抗的になる 9 感情の起状が大 8 沈む 8 1人になるのを怖がる 7 怒る 6 落ちつきがない 5 かんしゃくをおこす 4 おびえる 3 わがままになる 1	つきまとう 15 母親につかなくなる 7 母親を探す 4 登園拒否 4 登校拒否 4 兄弟けんかをする 3 祖母の家にいきたがらない 1	寝不足 8 食欲不振 4 嘔吐 2 下痢 1 頻尿 1 喘息 1	夜泣き 3 指しゃぶり 3 偏食 1 口唇にさわる 1

表4　発達段階精神および身体への影響

発達段階	精神および身体への影響
乳児期 11人	母親に寄りつかない(2) 夜泣き(1)　つきまとう(1)　甘える(1)　母親をさがす(1) 1人になるのを怖がる(1)　おびえる(1)　N＝8件
幼児期 85人	甘える(20)　さびしそうな表情をする(16)　つきまとう(13) 母親に寄りつかなくなる(4)　反抗的になる(5)　登園拒否(4) 感情の起状が大になる(3)　不安がる(3) 1人になるのを怖がる(3)　3名以上のもののみ　N＝106件
学童期 62人	さびしそうな表情をする(16)　甘える(7)　不安がる(7) 沈む(6)　感情の起状が大になる(5)　寝不足(5)　登校拒否(4) 笑顔がなくなる(4)　怒る(4)　1人になるのを怖がる(3) 反抗的になる(3)　落ちつきがなくなる(3) 兄弟けんかをする(3)　3名以上のもののみ　N＝80件
思春期 14人	寝不足(2)　甘える(1)　沈む(1)　笑顔がなくなる(1) さびしそうな表情をする(1)　反抗的になる(1)　怒る(1) 食欲不振(1)　N＝9件

院に母親が付き添わなければならない状況において，母親の世話が必要な小さい子どもを家に残さざるを得ない実態が生じたということである。また現在のように兄弟数が少ない場合，家に残された同胞は1人であるという場合も多いと言える。

このように病気の子どもの方に母親がついている状況は，同胞にとっては母親が自分を見捨てたのではないかという不安を抱かせるかもしれない。母子関係の重要なこの時期の母親の留守は同胞にも心理的影響が大きいものがあるといえる。また母親にとっても子どもの反応は不安材料につながりやすく，母親に対する看護者の助言や援助が重要となる。

家族形態において核家族が過半数であることから父親が同胞の世話をしなければならない状況が生まれるが，子どもが小さい場合は多くは別居の

祖父母が世話をすることとなる。この場合，同胞にとっては慣れない環境と今までとは異なる育児者によりケアを受けることで，不安と緊張が大きいことは明らかである。また，母親の留守期間が長期にわたるとき，子どもの成長への影響のみならず，他に老齢の祖父母の健康を損なうという連鎖的な影響がある例もあった。このような状況が家族あるいは家族以外にも影響をもたらすことに注目する必要がある。

2）同胞の状況と影響の有無について

同胞がおかれた状況の7項目のx^2検定では，家族形態が同胞に影響を与えることを認めたが，数量化II類による分析では，むしろ他の項目の方が影響をより与えていることが伺われる。すなわち表2から，発達段階において特に同胞が幼児期であること，同胞の世話人が別居の祖父母であること，母親の帰宅頻度が少ないことなどがより影響を与える因子であることがわかる。x^2検定で家族形態が影響因子として出たということは，世話をする人が2世代と3世代では当然異なってくるという現実によるものと考える。事実，2世代家族の場合をみると100名中66名（66.0%）は別居している祖父母の世話を受けており，23名（23.0%）は父親が世話をしている。これに対し，3世代では72名中49名（68.1%）が同居している祖父母が世話をしており，2世代では家族以外の世話が多いという点で明らかに異なった状況を示している。また，父親が世話をした同胞は25名中22名（88.0%）が学童期以上で，同じ2世代でもこの場合の影響は少なく，3世代で同居の祖父母が世話をしたのとほぼ同じである。

正判別率の59.4%という値からみると，今回の7項目からだけの判断は難しく，この項目以外にも種々の要因が絡んでおり，簡単に測りきれるものではない。同胞のパーソナリティー，家族との日頃の関わり，友人関係，祖父母の日常の関わりなどについても考慮する必要性があると考える。

3）発達段階と精神面への影響内容

今回の結果では「情緒面への影響」が1番高率であった。この調査と状況は異なるが，望月[5]らは2歳6ヶ月の検診時の調査における母親が心配する行動の出現率を報告している。このうち今回の調査の3歳児と比較可能と思われる6項目について検討した。母親が家にいて子どもの心配になる行動の出現率と，今回の母親不在による同胞の心身への影響として母親が心配した子どもの反応という点で比較してみた。家に残された同胞の方において明らかに高かった「つきまとう」は38.9%に対し検診時の調査では3.3%であり，「甘える」は27.8%に対し10.1%の出現率であった。同胞が「つきまとったり」，「甘える」ということは母親が家に帰ったとき子どもが母親の側を離れなかった状況を指していると考える。「おちつきがない」の項目のみ，検診時の調査の方の率が高く，13.7%に対し同胞は5.5%であった。このことは付き添いをしている母親は，日常の子どもの行動の観察が少なくなっていることによるであろう。また，患児の同胞に見られる「さびしそうな表情」，「不安がる」，「感情の起伏が大きくなる」，「沈む」，「笑顔がなくなる」などは検診時の調査の方には出現しておらず，同胞の子どもの方にのみにあがっている項目である。小嶋[8]は2歳から4歳の年齢では，両親からの分離による不安は最も強く，うつ状態も見られると述べているが，このような情緒面においての反応には注意を向けることが重要であろう。

次に「行動の障害」の中の「母親によりつかない」という状況は，母親にとっては上記の「さびしそうな表情」以上に心理的影響が大きいであろうと思われる。ケースのなかには，1年以上2歳の患児の付き添いをし，その途中に出産をしたものがいた。そして，生まれた子どもはすぐに同居の59歳の祖母に預けており，母親は家にはあまり帰ってなかったものがいた。Schaller[6]の研究では7ヶ月以下の乳児においては見知らぬものも母親代理者として受容されると述べているが，母子相互作用が重要な時期に，このような母子分離期間が長いことは将来の母子関係や母親の養育態度にも関連すると考える。大学病院のような医療機関では，家が遠隔地であったり，入院が長期に亘る

ことがある。さらに，難治性の疾患の場合は母親が付き添いに専念したり，祖父母等との関係が悪い場合など帰りたがらない状況もあり，影響がでやすい条件が多くなりがちであることも考慮する必要がある。次に登園拒否，登校拒否の例は 172名中８名（4.7%）に見られた。これらケースの家族のおかれた状況は前報[3]でもいくつかのケースを報告したようにさまざまである。渡辺[7]は不登校児の心身医学的研究のなかで影響を与えると思われる要因として，転居，転校，母親の就労をあげている。すなわち，入学，転校などの発達的危機と病気，母親不在というような状況的危機が重なると，危機を乗り越えられない子どもも生じることがわかる。９歳の女児16名中の３名に登校拒否が見られたことは，女性としての一つの発達危機と関連しているのではないかと考える。島内[8]は発達危機が克服できないと状況的危機が発生しやすくなり，状況的危機が克服できないと発達的危機も発生しやすいと述べているが，今回の結果からもそのことが伺える。

大学病院のように慢性難治性の疾患をもつ小児が長期に入院するような場合，小児の心理面への影響も大きく母親が付き添うことも多い。そして，核家族化が進んでいる現在では，そのことが家族に与える影響も大きい。患児に同胞がいる場合には，その子どもも発達途上にあり，母親の養護が必要な時期であることが多い。母親は付き添いをしながら家族の心配をせざるをえないが，同胞のことが最も気になることになる。母親は患児とその同胞の両方にとって重要な役割を担う存在であるので，このような状況の母親に対して看護者が適切な助言をすることにより母親の不安を軽減することが可能である。そうすることで，母親はよりよい条件で患児のケアにも参加が可能となる。もちろん，家族にもたらされる影響は，家族に起きる経時的変化や距離的条件など多くの要因によって左右される。このような要因や，今回のような状況的危機に強く影響する因子を考慮し，看護者は母親と共に考えたり，母親をサポートすることが大切である。よりよい家族関係への援助が得られるなかで，母親は患児のケアにより良い条件で参加することができ，患児にとってもよい影響を与え得ると考える。

5．結　　論

今回，母親の付き添い時に，家に残した子ども172名の心身面への影響について検討した。その結果を要約すると以下のとおりである。

1）　家に残された同胞は，母親のケアを必要とする幼児期が一番多く，この子たちへの影響を考慮する必要がある。

2）　同胞への影響は，x^2検定では，家族形態（２世帯，３世帯）に有意差が認められたが，数量化Ⅱ類では発達段階，世話人，母親の帰宅頻度が関連することを認めた。

3）　同胞の精神面への影響で特徴的なことは，「さびしそうな表情」，「不安がる」，「感情の起伏が大きくなる」などであった。また，行動への現れとして登園拒否，登校拒否が見られた。

謝　　辞

本研究にの調査にあたり御協力頂きました御家族の皆様，また小児科病棟の藤井陽子姉をはじめ皆様に謝意を表します。

文　　献

1）野嶋佐由美：家族看護学への展望，アメリカ合衆国のファミリーナーシングの動向を通して，看護研究，22：2－9，1989
2）太田にわ，他：母親付き添いの長期入院が家族に及ぼす影響，アンケートをとおして，小児看護，10：1143-1148，1987
3）太田にわ，他：小児の母親付き添いによる長期入院が家族に及ぼす影響―第１報家に残された同胞への影響―，看護展望，17：94-98，1992
4）望月　嵩，木村　汎：現代家族の危機　新しいライフスタイルの設計　有斐閣，東京，211-215，1989
5）望月武子，他：子どもの発達と母子関係の継続的考察Ⅲ―２歳６か月時の状況―，第37回日本小児保健学会，講演集：228-229，1990
6）小嶋謙四郎：乳児期の母子関係　アタチメントの発達第２版，医学書院，東京，109-116，1989
7）渡辺　純，他：不登校児の心身医学的研究，特に発熱について，心身医学，24：104-110，1984
8）島内　節：看護における家族分析・援助のための枠組

の検討―演繹的・機能的アプローチを試みて―，看護研究，22：27-43，1989
9）駒松　仁子，他：小児がんの子どもと家族の実態調査（第二報）―付き添いが家族に及ぼす影響について―，小児保健研究，50：521-525，1992
10）吉武香代子：小児看護における母親の付き添い，看護教育，33：498-503，1992
11）波多野梗子，村田恵子：患者・家族への援助と看護婦の役割，医学書院，1984
12）中村めぐみ：白血病に対する新しい対応とケア，危機状態にある患者・家族の理解と看護的アプローチ，臨床看護，17：86-89，1991
13）鈴木敦子，他：重症心身障害児を抱えて崩壊の危機にある家族に対しての病院のケアのあり方，大阪府立看護短期大学紀要，10：87-100，1988

（1992年10月21日受理）